

# 蚕神社の基礎的研究

—『上野国神社明細帳』の分析から—

吉井 勇也

## 目次

はじめに

一 群馬県内における蚕神信仰の特色

二 明治期における蚕神社の地域的展開

結語

はじめに

近代以降、養蚕・製糸業は国内の主要産業としての位置を占めた。在来技法に海外からの知識や技術を加え、蚕種製造・飼育方法・製糸業等さまざまな関係

分野で改良や技術開発が行われた。しかし蚕飼育の現場では神仏への祈願が根強く行われ、俗信・禁忌に人々は頼ろうとした。

本稿は、蚕神を祀る神社について、群馬県内における歴史的・空間的展開を検討するものである。養蚕を守護する蚕神信仰の年代について、近世期の鈴木平九郎『公私日記』や分社許状・刷り物・絵画などの紹介を通し、西海賢二や畠山豊によって言及がなされた。しかしいずれも蚕神信仰の「点的」な把握にとどまり、地域的な広がりを示す「面的」な把握作業は十分に行われてこなかった。阪本英一は、『群馬県の養蚕習俗』などの文献に基づき民俗調査のデータを加えて、蚕神

信仰の地域性を整理した〔阪本 二〇〇六〕。群馬県内における蚕神の分布的特徴が示されたことで、同地における蚕神研究の足がかりとなる基礎資料が整備されたといえよう。

しかしながら阪本の論に関していえば年代的な言及が欠け、「いつごろ、どのような地域へ蚕神信仰が展開していたか」という問題について、実証的な言及がなされなかった点が課題として残る。阪本の業績に年代的な設定を加えることにより、蚕神信仰の歴史的な推移や空間上の展開を検討する上で、一定の指標を提示することができると筆者は考える。また近世末期から明治初期にかけての、飼育と密接な関係にあった蚕神信仰の具体像を明らかにすることで、蚕糸業史における蚕神信仰という空隙を埋める作業となろう。本稿では、共時的な年代設定が可能となる『神社明細帳』を利用し、群馬県内における蚕神社の分布とその傾向を明らかにしたい。

## 一 群馬県内における蚕神信仰の特色

群馬県内の蚕神に焦点をしぼり、概要を説明しながら阪本の論を紹介していきたい。阪本は「蚕神信仰の地域性」を、蚕影信仰、絹笠信仰、オシラサン信仰の三点から述べている。いずれも、かつて群馬県内で広く信仰された蚕神である。

蚕影（こかげ）とは、茨城県つくば市神郡の蚕影神社が本社とされ、祭神は稚産霊命・木花開耶姫命・埴山姫命の三柱である。そのほかに蚕の由来を説く金色姫の伝承を伝えている。蚕影神社では、豊蚕の御利益をうたって近世期には布教活動を行っていたとされ〔西海 一九七九〕、別当寺として桑林寺が存在していた。東京都・神奈川県には十九世紀ころから、蚕影山の勧請・分祠の記録がみられる。群馬県内においても文化年間（一八〇四―一八一七）の銘をもつ小祠があるほか、近世期の年号をもつものが十四例確認されている。阪本によると、蚕影信仰は県東部の平地部と前橋市から利根郡水上町（現、みなかみ町）へつな

がる地域に分布し、利根川本流の流域と片品川流域に目立っている感があるとしている〔阪本 二〇〇六 四一、四二〕。

絹笠（きぬがさ）について、その本社ははっきりしない点もあるが、近世期の錦絵に「絹笠大神」として描かれている。その撰文に蚕桑の祖神として、「常陸国鹿島郡日向川村蚕灵山千手院星福寺」に祀られているとある。同寺院は現、茨城県神栖市日川の蚕霊山千手院星福寺に比定され、近くに蚕霊神社がある。絹笠大神の錦絵撰文については曲亭陳人（滝沢馬琴）本人の撰であることが明らかにされ、馬琴の日記からその裏付けが行われた〔畠山 二〇〇二〕。撰文にあたり馬琴は星福寺を調査しているが、同寺には蚕霊尊（現在は馬鳴菩薩）が安置されており、かつてはこの像が各地を巡行し、開帳されたという。絹笠大神は錦絵や掛軸、刷り物が多く、養蚕の指導書である蚕書の挿絵や正月の初絵、富山の売薬とともに配られる刷り物などが確認されている。群馬県内では文政十三年（一八三〇）の『万事覚』二月初午の項で記載が見られ〔高崎市史編さん委員会 二〇〇二〕、近世期の年

号をもつ小祠がある。阪本の解説では、松井田町、安中市、箕郷町、榛東村から前橋市にかけての地域に分布がまとまっているほか、下仁田町、神流町、北橋村にも石碑や信仰の分布がみられるといい、「利根川より西に中心があり、蚕影信仰と一部で重なり合うが、北部への石碑の広がりは少ないように感じられる」としている〔阪本 二〇〇六 三七、四二〕。

オシラサン信仰は、群馬県内で蚕神の信仰として知られた。県内山間部では初午前夜のオシラマチに來臨するという伝承がある〔板橋 一九八三 三五〕。屋内神的な性格が濃いものと考えられ、祭神として特定の社寺と結びつく事例はなく、近世期の年号をもつ石造物は見つかっていない。阪本の指摘するように、多野・吾妻・利根・勢多各郡といった、「県周辺部」に分布がみられ近世文書にも記載が確認されるものの、ある程度のまとまった数量データを抽出できる資料は見つかっていない。このため本稿では「オシラサン信仰」についての検討を見送ることにしたい。

以上、蚕神信仰の特色について概要を紹介してきたが、いずれも近世後期には存在が知られ、群馬県下に

流布していた。

## 二 明治期における蚕神社の地域的展開

これらの蚕神が、いつごろ、どの程度群馬県内に展開していたかを検討してみたい。こうした考察を試みるにあたり、精緻な年代設定、ある程度まとまった量的データ、事例同士の均質さといった条件を満たす資料として『上野国神社明細帳』（群馬県立文書館蔵）を用いる。群馬県内の『神社明細帳』に至る資料群は、明治初期から政府の指示で作成され、全四系統、総冊八十二冊にのぼる〔丑木 一九九三 二五〕。政府の宗教政策上、国内の大小精粗に及ぶ神社の実態把握が目的とされ、数回にわたる調査項目変更を経て、『明治十二年上野国神社明細帳』としてまとまる。以降、『明治十二年上野国神社明細帳』は、昭和二十年代まで県内の神社台帳として機能する。政府による宗教政策上の必要から作成され、公的な台帳として使用されたとする同資料の性格は、明治以降の社寺を把握する上で、信用性の高さを示すものであるといえよう。

本稿では『明治十年神社明細表』（簿冊番号二七二六―二七三九、以下『神社明細表』とする）、『明治十二年上野国神社明細帳原簿』（簿冊番号一九六二―一九八五、以下『神社明細帳原簿』とする）『明治十二年上野国神社明細帳』（簿冊番号一九九八―二〇二五、以下『神社明細帳』とする）を使用した。これらの調査・編纂過程から、記載された事例の年代を明治十二年左右と設定した。記載された社名より「蚕影」「蚕掛」という表記を含む社については「蚕影社」、「絹笠・衣襲・衣笠」については「絹笠社」と判断して社名を抽出し、一覧表にした（表1）<sup>①</sup>。また分布状況を示すため地図化を行った（図1）<sup>②</sup>。図表から読み取れる内容を整理すると以下の点を指摘できる。

表1 蚕影社・絹笠社一覧

〔蚕影社〕

番号	所在地(神社明細帳)	社名	社格	祭神名	形理・規模(開 口・奥行)	記載の有無(簿 冊番号一頁)	備考
	和泉郡針山新田字西沢 (平成合併前)和泉郡品川村	蚕影神社 ※1 ※2 ※3	無格社	保食神・日本武尊、 大山祇命、建御名 方尊 ※4	本社(150・150)	2726-179	2018-69
1							※1、境内440坪、宮有地、信託9人。(備) ※2、明治41年5月28日、同村字西沢村・五尊神社を合併、村社 御影神社と改称。(備) ※3、「絹笠社」蚕影神と表記。(原簿) ※4、御影神社・保食神、そののみ表記。(原簿) ※5、開口二尺五寸、奥行二尺五寸、板葺 土座、間口六尺、奥行六尺、板葺土と表記。(原簿)
2	和泉郡平川村字中ノ坊 (平成合併前)和泉郡和泉村	蚕影社	境内末社	木花開耶姫命	石祠(48・45)	2726-136	1978-124
3	和泉郡(舊)原村字義助寺 (平成合併前)和泉郡和泉村	蚕影社 ※1	境内末社	豊受姫命	石祠(60・55)	2726-113	1978-86
4	和泉郡菟野村字原 (平成合併前)和泉郡山場村	蚕影社 ※1	境内末社	保食命	石祠(65・60)	2726-68	1977-203
5	和泉郡立岩村字須賀 (平成合併前)和泉郡山場村	蚕影神社	境内末社	保食命	石祠(68・60)	×	1977-194
6	和泉郡中免知村字八幡沢 (平成合併前)沼田市	蚕影神社	境内末社	保食命	石祠(70・70)	2726-209	1977-134
7	和泉郡奈良村字宮ノ窪 (平成合併前)沼田市	蚕影神社 ※1	境内末社	字氣母野神 ※2	石祠(80・75)	2726-199	1977-120
8	和泉郡沼田村字清水 (平成合併前)沼田市	蚕影神社 ※1 ※2	無格社	保食命	本社(150・220) ※3	2716-252	1976-44
9	和泉郡恩田村字才之神 (平成合併前)沼田市	蚕影社	境内末社	保食命	石祠(70・60)	2726-256	1976-69
10	和泉郡生土上村字能野 (平成合併前)沼田市	蚕影社	境内末社	保食命	石祠(80・70)	×	1976-76
11	和泉郡上夜村字藤助原 (平成合併前)和泉郡月夜野	蚕影社	境内末社	保食命	石祠(130・220)	2726-285	1976-122
12	和泉郡月夜野町字橋 (平成合併前)和泉郡月夜野	蚕影神社	境内末社	保食命	社字(400・400)	2726-341	1978-239
13	和泉郡下津村字中村 (平成合併前)和泉郡月夜野	蚕影社	境内末社	豊字氣母野神	石祠(55・55)	2726-369	1976-229

14	吾妻郡飯沼村字中ノ条 (平成合併前) 吾妻郡中之条町	重影神社	境内末社	木花開耶姫命	社字(100-80)	2730-279	×	2000-316	
15	吾妻郡平井村字横田 (平成合併前) 吾妻郡中之条町	重影社	境内末社	宇気母智神	社字(40-50)	2730-271	1975 1/2-14	2000-294	
16	北勢多郎山郷村字下藤井 (平成合併前) 和佐郡昭和村	重影社 ※1	境内末社	不詳	石祠(150-185)	2726-399	1978-206	2005-6	※1、由緒「慶応4年2月創立」。(帳)
17	南勢多郎山下村字番場 (平成合併前) 勢多郡赤城村	重影社	境内末社	不詳	石祠(82-82)	×	1965-234	2002-139	
18	清勢多郎山田村字桑森 (平成合併前) 勢多郡赤城村	重影神社	境内末社	豊受姫命	石祠(80-80)	2738-215	1965-181	2002-117	
19	清勢多郎山田村字八幡 (平成合併前) 勢多郡赤城村	重影神社 ※1	境内末社	豊受姫命	社字(120-120) ※2	2738-219 2738-220	1965-190	2002-122	※1、明治10年8月同村字集山より移転。(帳) ※2、依田正義氏(120・100)。(帳) ※「神社明細表」で比定できず。
20	南勢多郎山田村字前田 (平成合併前) 勢多郡赤城村	重影神社	境内末社	豊字氣比売神	石祠(90-80)		1965-197	2002-127	※1、[ふせんのよから]石祠(100-180)。(原簿)
21	南勢多郎崎沢村字北久保 (北ノ窪) (平成合併前) 勢多郡赤城村	重影神社	境内末社	豊受姫命	? (100-180) ※1	2738-172	1965-69	2002-95	
22	南勢多郎崎沢村字天神 (平成合併前) 勢多郡赤城村	重影神社	境内末社	豊受姫命	石祠(70-100)	2738-177	1965-83	2004-126	
23	西群馬郡白井村字大簗子持 (平成合併前) 前橋市	重影社 ※1	境内末社	宇気母智神	石祠(120-160)	2732-187	1966-38	2006-263	※1、大正2年11月28日、本社へ合併。(帳)
24	南勢多郎下堀田村字奥原 (平成合併前) 前橋市	重影神社	境内末社	稲産靈命	石祠(80-70)	2728-211	1964-43	2002-214	
25	南勢多郎荒子村字中屋敷 (平成合併前) 前橋市	重影神社	境内末社	和久産果日命	石祠(55-94)	2728-130	1963-22	2002-241	
26	南勢多郎荒子村字丸山 (平成合併前) 前橋市	重影神社	境内末社	和久産果日命	石祠(100-160)	2728-129	1963-12	2004-175	
27	西群馬郡下中屋村字新井(天 神) (平成合併前) 高崎市	重影社	境内末社	大食都姫命	石祠(150-200)	2731-37	1960-39	2008-13	
28	西群馬郡天中屋村字村内 (平成合併前) 高崎市	重影社	境内末社	稲産靈命	社字(75-150)	2731-86	1968-302	2008-22	
29	西群馬郡下之堀村字村内 (平成合併前) 高崎市	重影社 ※1	境内末社	大食都姫命	社字(600-900) ※2	2731-50	1969-43	2008-11	※1、合設菅原清真公。(帳) ※2、建物瓦葺と表記。(原簿)
30	南勢多郎下田沢村字鹿角保 (平成合併前) 勢多郡黒保根村	重影山神社	境内末社	保食命	石祠(55-50)	2728-287	1963-247	2003-101	
31	山田郡山田村字横ヶ谷戸 (平成合併前) 南生市	重影社	境内末社	保食命	石祠(100-80)	2734-225 1/2-166	1979	2022-7	
32	東群馬郡後援村字飯玉九九 (平成合併前) 前橋市	重影神社	境内末社	豊受比売命	社字(800-900)	2728-21	1962-29	2002-10	

33	野田郡藤村字清水 (平成合併前)新田郡常盤村	重影神社	境内末社	保食命	柱字(80・75)	2739-13	1981-189	2011-96	
34	佐位郡香林村字花之本 (平成合併前)佐波郡赤堀町	重影神社	境内末社	保食命	石祠(70・65)	2737-99	1984-111	1999-62	
35	佐位郡渡志江村字福岡 (平成合併前)伊勢崎市	重影神社 <sup>※1</sup>	境内末社	保食命	石祠(62・60)	2737-159	1984-57	1999-31	
36	郡波郡宮子村字北沢 (平成合併前)伊勢崎市	重影神社	境内末社	保食命	石祠(100・200)	2737-182	1985-108	2009-141	
37	郡波郡宮子村字下田 (平成合併前)伊勢崎市	重影神社	境内末社	豊受姫命	柱字(130・140)	2737-196	1985-127	1999-269	
38	郡波郡東上ノ谷村字明神東 (平成合併前)伊勢崎市	重影神社 <sup>※1</sup>	境内末社	豊受姫命	柱字(300・500)	2737-193	1985-119	2009-133	※1、明治41年5月22日、本社へ合併。(帳)
39	新田郡堀口村字中堀 (平成合併前)新田郡尾島町	重影神社	境内末社	保食命	柱字(100・100) <sup>※1</sup>	2739-292	1980-254	2021-73	※1、「木祠」と表記。(原簿)
40	新田郡大鏡村字沢上 (平成合併前)新田郡尾島町	重影神社	境内末社	豊受姫命	石祠(65・45)	2739-174	1980-140	2021-93	
41	新田郡新小湊村字下島 (平成合併前)新田郡尾島町	重影神社 <sup>※1</sup>	境内末社	豊受姫命	柱字(210・160)	2739-182	1980-126	2021-88	※1、「重影神社」の横に「重影」と朱書きあり。次頁に「重影神社 向命ニ付當社へ合併」と記載されたふせん貼付有り。(原簿)
42	北丹美郡白川村字赤津 (平成合併前)日豪郡下仁田	稲荷重影神社 <sup>※1</sup>	境内末社	倉稻魂命	柱字(300・220)	2733-172-193	1972-196	2015-187	

【網笠社】

番号	所在地(神社明細帳)	社名	社格	祭神名	形態・規模(間口・奥行・分)	記載の有無 (簿記明細帳)	簿記明細帳 番号	神社明細帳 番号	備考
1	吾妻郡原町字新 (平成合併前)吾妻郡吾妻町	衣織社	境内末社	宇家母知命	柱字(55・88)	2730-195	×	2017-14	
2	吾妻郡大田村字堀田 (平成合併前)吾妻郡吾妻町	網笠神社	境内末社	大宜都比元命	柱字(80・80)	2730-4	×	2000-80	
3	吾妻郡桐尾村字七田 (平成合併前)吾妻郡中之条	網笠社 <sup>※1</sup>	境内末社	不詳	柱字(55・45)	2730-286	1975-172-26	2017-177	※1、明治10年10月、本社字天神より移転。 明治41年1月20日、本社へ合併。(帳)
4	吾妻郡赤坂村字原坂 (平成合併前)吾妻郡中之条	衣織神社	境内末社	木花之依久夜思売命	柱字(110・90)	2730-276	×	2000-311	
5	吾妻郡五町田村字明々畑 (平成合併前)吾妻郡東村	衣笠社	境内末社	権産霊命	石祠(126・171)	2730-310	1975-272-371	2000-337	
6	吾妻郡多田(東郡馬郡)岩神村 (平成合併前)碓氷市	網笠神社 <sup>※1</sup>	境内末社	木花取耶姫命	柱字(126・171)	2738-7	1982-137	2001-47	※1、明治14年11月10日、同村字河原町より合併。(帳) ※2、無谷社(原簿) ※3、宮神村字河原町(原簿) ※4、本社 間口九尺 奥行六尺 井段 間口三間 奥行貳間。(原簿) ※5、境内坪数 百四拾坪地籍民有地、信徒八十人。(原簿)

7	南勢多郡下小出村赤城畑 (平成合併前) 前橋市	絹笠社	境内末社	豊受姫命	社字(200-100) ※1	2738-31	1962-209	2002-31	※1、板宮。(原簿)
8	南勢多郡笠字初富土見 村 (平成合併前) 勢多郡富土見	衣笠社 ※1	境内末社	保食命	社字(700-800)	2738-100	1962-344	2002-149	※1、明治40年7月16日、本社へ合併。(帳)
9	南勢多郡笠井村沼戸前 (平成合併前) 前橋市	絹笠神社	境内末社	熊産靈命	石祠(500-600)	2728-206	1964-28	2002-217	
10	南勢多郡二之宮村字宮本 (平成合併前) 前橋市	絹笠神社 ※1	境内末社	和久産巢日命	石祠(96-60)	2728-169	1964-83	2002-227	※1、明治40年7月25日、本社へ合併。(帳)
11	南勢多郡笠字村字中屋敷 (平成合併前) 前橋市	絹笠神社	境内末社	和久産巢日命	石祠(75-110)	2728-130	1963-21	2002-241	
12	南勢多郡下大屋村字明神山 (平成合併前) 前橋市	絹笠神社	境内末社	和久産巢日命	石祠(72-65)	2728-133	1963-34	2002-246	
13	南勢多郡笠口村字宮田 (平成合併前) 前橋市	絹笠神社	境内末社	和久産巢日命	石祠(70-85)	2728-123	1963-4	2002-256	
14	南勢多郡(旧)田字富士之宮 (平成合併前) 勢多郡相川村	絹笠社	境内末社	保食命	石祠(80-100)	2728-99	1964-293	2003-35	
15	南勢多郡堀之下村字奥女堀 (平成合併前) 前橋市	絹笠神社	境内末社	和久産巢日命	石祠(76-65)	2728-184	1964-136	2003-255	
16	南勢多郡二之宮村字十二天 (平成合併前) 前橋市	絹笠神社	境内末社	和久産巢日命	石祠(90-70)	2728-172	1964-91	2004-156	
17	南勢多郡二之宮村字八王子 (平成合併前) 前橋市	絹笠神社	境内末社	和久産巢日命	社字(196-100) ※1	2728-173	1964-96	2004-158	※1、板宮。(原簿)
18	南勢多郡堀久保村字宮久保 (平成合併前) 勢多郡大胡町	絹笠神社	境内末社	和久産巢日命	石祠(60-95)	2728-120	1964-220	2004-215	
19	西群馬郡北里村字桐原 (平成合併前) 群馬郡群馬町	絹笠社	境内末社	和久産巢日命	石祠(100-100)	2731-288	1966-265	2006-34	
20	西群馬郡北里村字太郎敷 (平成合併前) 群馬郡群馬町	絹笠社	境内末社	熊産靈命	石祠(100-150)	2731-306	1966-190	2006-131	
21	西群馬郡高井村字松木 (平成合併前) 群馬郡群馬町、 前橋市	絹笠社	境内末社	宇迦之御魂命	石祠(70-80)	2731-240	1969-155	2006-144	
22	西群馬郡日井村字宮本町 (平成合併前) 北群馬郡子持 村	絹笠神社	境内末社	受持命	石祠(75-67)	2732-188	1966-48	2007-94	
23	山 西群馬郡村上村字白田 (平成合併前) 北群馬郡小郷 上村	衣笠社	境内末社	字家母智神	石祠(60-100)	2732-231 2732-232	1967-270	2007-105	※「神社明細表」で比定できず。
24	西群馬郡村上村字石臼 (平成合併前) 北群馬郡小郷 上村	衣笠社	境内末社	字家母智神	石祠(280-150)		1967-275	2007-108	※「神社明細表」で比定できず。
25	西群馬郡村上村字田嶋 (平成合併前) 北群馬郡小郷 上村	衣笠社	境内末社	字家母智神	石祠(70-110)	2732-229	1967-284	2007-112	



26	西野長原下小島村字西浦二 (平成合併前)岡崎市	絹笠社	境内末社	和久盛集日命	石祠(100・100)	2731-323	1969-59	2008-155	
27	具野島郡徳丸村字鹿渡 (平成合併前)蒲崎町	衣笠神社	境内末社	豊受姫命	社字(900・ 1200)	2728-51	1962-105	2004-23	
28	徳丸郡下磯部村字西龍泉寺 (平成合併前)安中市	絹笠神社	境内末社	大直都比売命	社字(80・50)	2733 2/2-337	1974-23	2010-63	
29	徳丸郡高梨子村字徳貞戸 (平成合併前)龍木郡松戸田 町	絹笠神社	境内末社	大直都比売命	社字(400・500)	2733 2/2-391	1974-340	2010-114	
30	徳丸郡下後間村字大宮 (平成合併前)安中市	絹笠神社	境内末社	大直都比売命	社字(80・100)	2733 2/2-430	1974-222	2012-80	
31	徳丸郡上磯部村字磯部辺 (平成合併前)安中市	絹笠神社	境内末社	宇氣母智命	社字(100・95)	2733 2/2-335	1974-4	2012-180	
32	佐佐郡伊与久村字龍電渡 (平成合併前)佐波郡染町 新田町	衣笠神社 ※1	境内末社	保食命	石祠(120・200)	2737-40	1984-259	2009-41	※1、明治40年12月、本社へ合併。 (※2、[「字芝崎」]と表記。(原簿)
33	新田郡小金井村字上根 (平成合併前)太田市、新田郡 新田町	絹笠神社	境内末社	長石羽命	石祠(60・60)	2739-99	1981-250	2011-212 2021-165	
34	新田郡新井村字八幡 (平成合併前)太田市	絹笠社	境内末社	宇氣母智命	石祠(100・200)	2739-240	1980-221	2021-27	
35	北土茅野菅原村字子持渡 (平成合併前)甘栗郡砂敷町	絹笠神社	境内末社	大直都比売命	社字(150・130)	2733 1/2-166	1972-95	2015-44	
36	北土茅野西野牧村矢川耕池 字龍崎 (平成合併前)甘栗郡下仁田 町	絹笠社 ※1	境内末社	宇氣母智神 ※2	社字(150・140) ※3	2723 1/2-235	1972-125	2015-190	※1、同村字紫ノ沢村社神名神社の末社のところ、明治10年10 月本社境内に末社として移転。(※2 ※3、木祠。(原簿)
37	北土茅野南紀井村字東 (平成合併前)岡崎市	絹笠神社	境内末社	豊宇氣母智神	社字(210・330)	×	1973-3	2016-114	※1、[「字東山」]と表記。(原簿)
38	多田郡池村字大宮 (平成合併前)多田郡吉井町	絹笠社	境内末社	不詳	社字(800・600) ※1	2727-187	1971 1/3-39	2014-134	※1、欄付されたかきさんの下に「壹尺二寸四面 上屋間口八尺 奥行六尺」とあり。(原簿)
39	多田郡多比良村字常大 (平成合併前)多田郡吉井町	絹笠社	境内末社	天棚姫姫命	社字(150・130)	2727-198	1971 1/3-99	2014-157	

・「上野国神社明細帳」の内容を基礎データとし、「上野国神社明細表」、「上野国神社明細帳(原簿)」、「(帳)」は「上野国神社明細帳」を表す。  
・備考内の「(表)」は「上野国神社明細表」、「(原簿)」は「上野国神社明細帳(原簿)」、「(帳)」は「上野国神社明細帳」を表す。



『上野国神社明細帳』（群馬県立文書館蔵）より作成  
『ニューエスト 群馬県都市地図』（昭文社、2002年）を原図として使用。

図1 明治十二年ころの蚕神社の分布



『ニューエスト 群馬県都市地図』（昭文社、2002年）を原図として使用。

図2 群馬県市町村区分図（平成合併以前）

※本稿で言及する市町村のみ。

① 蚕影社は四十二社、絹笠社は三十九社確認された。

② 所在地について旧郡別の数を示すと次のようになる。「( )」内の数字が社数を示す。以下同。]

【蚕影社】

旧利根郡(13)、旧吾妻郡(2)、旧北勢多郡(1)、旧南勢多郡(10)、旧西群馬郡(4)、旧東群馬郡(1)、旧山田郡(1)、旧新田郡(4)、旧佐位郡(2)、旧那波郡(3)、旧北甘楽郡(1)

【絹笠社】

旧吾妻郡(5)、旧南勢多郡(13)、旧西群馬郡(8)、旧東群馬郡(1)、旧新田郡(2)、旧佐位郡(1)、旧北甘楽郡(3)、旧碓氷郡(4)、旧多胡郡(2)

③ 社格について数を示すと次のようになる。

【蚕影社】

無格社(2)、境内末社(40)

【絹笠社】

無格社(1)、境内末社(38)

④ 祭神名について数を示すと次のようになる。

【蚕影社】

保食神(命)・宇気母智神(19)、豊受姫

命・豊宇気毘売神・豊宇気比売神(12)、稚産霊命・和久産巢日命(4)、木花開耶姫命(2)、大食都姫命(2)、倉稻魂命(1)、不詳(2)

【絹笠社】

稚産霊命・和久産巢日命(13)、保食命・

宇気母智(知)命(神)・受持命(11)、大宜(巨)都

比売命(5)、豊受姫命・豊宇気毘売神(3)、木花咲

耶姫命・木花佐久夜毘売命(2)、宇迦之御魂命(1)、

長白羽命(1)、天棚機姫命(1)、不詳(2)

⑤ 形態、規模(間口)について数を示すと次のようになる(不詳を除く)。

【蚕影社】本社(2)、社宇(13)、石祠(26)

間口一尺未満(22)、二尺未満(14)、三尺未満(1)、

五尺未満(3)、五尺以上(2)

【絹笠社】社宇(17)、石祠(21)

間口一尺未満(18)、二尺未満(12)、三尺未満(3)、

五尺未満(1)、五尺以上(4)

以上の結果から、明治十二年ころにおける群馬県内の蚕神社について検討を行う。

まず所在地について、蚕影社は、北東部の山間地(旧利根郡)、県央部の中山間地(旧南勢多郡など)に多く展開している。東部の平地(旧西群馬郡から旧新田郡、旧那波郡)にかけてもまとまった分布がみられる。また旧吾妻郡、旧北甘楽郡のような、西部にも存

在している。絹笠社は、北西部の山間地（旧吾妻郡）、県央部から東西の平地（旧南勢多郡、旧西群馬郡）に多く展開している。西部の山間地から平地（旧碓氷郡、旧北甘楽郡）にかけても分布がみられる。また南西部から南東部（旧多胡郡、旧新田郡、旧佐位郡）にも存在している。県央からやや東寄りの地域（旧南勢多郡、旧西群馬郡）には、蚕影社、絹笠社ともに分布が集中し入り乱れている。蚕影社は県央から南・北東側の山間地・平地といった赤城山麓を中心に展開が目立ち、絹笠社は県央部・北西・南西部といった榛名山をつ字形に取り巻くかのような地域に展開しているといえる。それぞれの分布は県央部やや東寄りの平地で重なっていることも指摘できる。

こうした分布について物流の拠点となった都市部と、その近郊にあたる養蚕地という範囲を設定して整理すると、北部の沼田を中心とした地域に蚕影社密集地域があり、県央部の前橋や金古（旧群馬町）は絹笠社密集地域に近い。そのほか南西部の安中、県央東寄りの伊勢崎、東部の桐生などがあげられるが、いずれも絹市などで物流拠点が形成された場所である。周辺

に位置する農山村に蚕神社が確認できる。また幹線道路や河川との関わりで蚕神社の展開を整理すると、赤城村・沼田市・月夜野町の分布は、東西の沼田街道や利根川沿いに、川場村・利根村の分布は沼田街道・会津街道沿いに展開している。西部の中之条町・吾妻町の分布は吾妻川流域や長野街道にほぼ沿っている。南部に目を移すと、前橋市西部や群馬町にみられる蚕神社は沼田街道・三国街道に近く、伊勢崎市や尾島町の分布は利根川や広瀬川沿いに存在している。蚕神信仰は蚕種など養蚕関係商品の物流との関連を指摘する見解がある〔阪本 二〇〇六 四二〕、〔近藤 一九九六 六五〕。民間宗教者による媒介の一方で、物流を介した信仰伝播が推測される。

祭神については、蚕影社は保食神（命）・宇気母智神、豊受姫命・豊宇気毘売（比売）神が多く、絹笠社は稚産霊命・和久産巢日命、保食命・宇気母智（知）命（神）・受持命が多い。いずれも『記紀』で蚕の起源との関わりで説かれる神々である。蚕影社については、茨城県筑波山麓の蚕影神社との関連が考えられ、祭神である稚産霊命・木花開耶姫命・埴山姫命が

祭祀された可能性があるが、『神社明細帳』のデータでは少ない。また近世期から別当寺である桑林寺の布教活動が知られており、蚕影山本地仏として馬鳴菩薩などの仏や、牛王宝印を刷り込んだ掛軸が各地に存在している〔村上 一九三三、金田一 一九三三、畠山二〇〇二〕点も留意する必要がある。『神社明細帳』の祭神名についてはあくまで神名を記載しているが、明治以前の神仏混淆やその後の分離政策、『神社明細帳』調査の政策的意図との関係性を考慮する必要がある。

社格・形態についてまとめると、当時の蚕神社のほとんどが、なんらかの神社の境内末社として位置付けられ、大半を「石祠」が占めている。「本社」と表記される事例は社格が無格社のものである。「本社」や「社宇」とあるものの中には、具体的に板宮・瓦葺社殿などの事例〔蚕影【事例1】【事例8】【事例19】【事例29】【事例39】、絹笠【事例17】【事例36】〕があるが、『神社明細帳原簿』に七例記録が残るだけである。

規模について、蚕影社・絹笠社ともに間口が一尺未満（約三〇センチメートル未満）、二尺未満（六〇センチメートル未満）のことが多い。これは現在、神社

の境内で見られる石宮と同等の規模である。間口が三尺を越えるもののほとんどは形態が「社宇」であり、板宮や社殿である可能性が高い。また南勢多郡筑井村の絹笠神社【事例9】は「石祠」でありながら間口が九尺（一間半、約二メートル七〇センチメートル）もあるが、これは石祠を覆う上屋や社殿の規模である。上屋の事例は三例確認できる（蚕影【事例1】【事例8】、絹笠【事例38】）。間口が二尺に満たないような「小祠」が多いなかで、上屋を設けていたり一間以上の間口をもつ事例については、信仰の厚さに加え建立に際する一定の財力や結束性を窺わせる。本社のかに間口三間の拝殿をもつ絹笠社【事例6】はひときわ目を引く事例である。

また蚕影【事例42】は、「稻荷蚕影神社」であり、もともと「稻荷神社」と表記された横に「蚕影」と追記され、さらに稻荷神社へ合併された旨が付記されている。同様に蚕影【事例1】は、「稻荷社」と報告されていたものが、蚕影社に改められている。しかし明治四十一年（一九〇八）に村社「武尊神社」と合併し「稻荷神社」に社名を戻している<sup>30</sup>。『神社明細帳』編

纂時、現在進行的に蚕神信仰が広がりをみせていた事例とも考えられる。

## 結語

以上、文献資料上の共時的なデータを駆使することで年代設定に配慮しつつ、群馬県内における蚕神社の空間的展開を明らかにした。まず対象事例の年代設定は『神社明細帳』編纂時期から明治十二ごろとした。当時の蚕神社の空間的展開について、蚕影社は県央から南・北東側の赤城山麓地域を中心に展開が目立ち、絹笠社は県央を中心に、おおよそ榛名山をつ字形に取り巻くかのような地域に展開していた。また、それぞれの分布が県央部で重なっていることを指摘した。明治初期の蚕神信仰について、蚕影や絹笠と呼ばれた蚕神社が県の東西で特徴的な分布を示していたことが明らかになった。当時の蚕神社の大半は、間口二尺に満たない石造りの小祠であったが、一部で上屋や拝殿をもつ神社として建立されていたことも具体的に判明した。

また蚕神社の分布的な特徴について、物流の中心地と生産地という範囲の設定や、幹線・河川との関わりから傾向を整理した。蚕神社の分布地域のなかで、北部の沼田、県央部の前橋、南部の伊勢崎などが物流の中心としてあげられ、いずれも沼田街道、利根川などに沿って展開しているといえる。物流と地域間の結びつきとの関連で若干の考察を行うと、絹市で栄えた桐生・大間々及びその近郊と、蚕影信仰との関係性が注目される。蚕影【事例31】【事例33】【事例34】は桐生・大間々に近く、その北に蚕影【事例30】が存在する。渡良瀬川・足尾銅山街道に沿った東村にも文化三年（一八〇三）の石宮がある（勢多郡東村誌編纂室一九九八 三六三）。茨城県つくば市の蚕影神社には、享和元年（一八〇一）年に上州桐生新宿村、翌享和二年（一八〇二）年に同じ上州山田郡上広沢邑（現在の桐生市）から寄進された常夜灯（塔）が現存しており（江尻 二〇〇二 四二）、十九世紀初頭から蚕影信仰の展開が確認できる。桐生・大間々域については、赤城山の北に位置する沼田・利根域との関わりが指摘されている。『群馬県史 資料編二二』では、繭売買上

の訴訟史料から、沼田東部・利根村などからなる東入地域が十九世紀初頭に赤城山東南麓製糸地帯への原料繭の供給源であったという解釈が述べられている〔群馬県史編さん委員会 一九八二 九六八〕。また井上

定幸により、大間々の糸繭商人の繭買い付けの記録を通して、沼田・利根域との関係が指摘されている〔井上 二〇〇四 三六〇～三六四〕。流通経路としては、迂回路となる赤城山西麓の沼田街道等ばかりでなく、今日あまり知られていない赤城山東麓の根利道<sup>ねりみち</sup>が使用された。桐生・利根間を比較的直線的・短距離で結び、主要幹線として使用され、両地域の交流もみられた〔群馬県教育委員会文化財保護課 一九八三 九一〇〕。沼田・利根域にも蚕影社の濃密な展開がみられることから、赤城山をはさんだ両地域での分布を考える上で、都市部および近郊と、それらを結ぶ交通網の存在が注目される。一方の絹笠社については、榛名山をㇿ字型に取り巻いて展開しており、安中・金古（群馬町）・前橋・中之条といった地点との結びつきが推測される。近世末期、上州新田岩松氏のいわゆる「新田猫絵」（蚕に害をなす鼠の防除に効果があることと

れた）について、信濃国の種売りが仲介人を通じて買収めるといふ享和三年（一八〇三）の事例があることから〔落合 一九九六 一一二〕、こうした業者と信仰の関係性を考慮していく必要はある。

冒頭で述べたように、共時的な年代設定に留意することで、信仰の歴史的な推移や空間上の展開を検討するさいの、一定の指標を提示することが本稿のねらいである。ここで民俗調査データを基礎にした阪本の蚕神の地域性論と、明治十二ころの文書記録に着目した筆者の結論とを比較してみると、群馬県内における二つの蚕神分布の傾向に、著しい相違がなかったことに注目したい。

まず蚕影信仰について、阪本によれば、県東部の平地部と前橋市から水上町へつながる地域に分布し、「利根川本流の流域と片品川流域に目立っている感がある」としたが、この傾向は、筆者が明らかにした蚕影社の分布状態とほぼ符合する。

一方、阪本は絹笠信仰について、松井田町、安中市、箕郷町、榛東村から前橋市にかけての地域に分布がまとまっているほか、下仁田町、神流町、北橘村に



もみられるといい、「利根川より西に中心があり、蚕影信仰と一部重なり合うが、北部への石碑の広がりはいくぶん感じられる」として、筆者が示した絹笠社の分布状態とは、若干異なる。絹笠社は北部にも見られ、利根川から東側にも多く存在し、『神社明細帳』等の文書資料上、「利根川より西に中心」をもつ点を実証できなかった。しかし蚕影信仰にくらべ、絹笠信仰が県西部へと広がりをもつという点で、阪本と筆者は共通の結論に至った。

阪本の論は、聞き書きや観察調査といった民俗調査を基底にしていると考えられ、イエでの蚕神祭祀・行事・習俗をも射程におさめた蚕神信仰の概要を示しているものと推測される。本論で明らかにした分布を指標とすると、群馬県内において今日採集される蚕神信仰の分布傾向は、すでに明治十年代の蚕神社の展開に規定されていると考えられる。

## 参考文献

板橋春夫 一九八三 「養蚕習俗の研究―繭玉とオシラサマ儀礼をめ

ぐって―」『群馬文化』一九六 群馬文化の会 三一―四二頁

井上定幸 二〇〇四 『近世の北関東と商品流通』 岩田書院

丑本幸男 一九九三 「上野国神社・寺院明細帳解説」『上野国寺院

明細帳』一 群馬県文化事業振興会 三―四三頁

江尻達也 二〇〇三 「金色姫伝説と常陸国三蚕神社」『文学部の新

しい波』二 千葉大学文学部

金田一京助 一九三三 「関東のオシラ様」『民俗学』五一―一 民俗

学会 一―一五頁

群馬県教育委員会文化財保護課 一九八三 「日光への脇往還」 群

馬県教育委員会

群馬県史編さん委員会 一九八二 『群馬県史 資料編 一二』 群

馬県

群馬県立文書館 一九九二 「解説」『群馬県行政文書件名目録』五

一―二五頁

阪本英一 二〇〇六 「養蚕の神々」『養蚕の神々』安中市ふるさと

学習館 三三―四四頁

鈴木照美 一九八三 「蚕神信仰」『西郊民俗』一〇三 西郊民俗談

話会 八―一六頁

勢多郡東村誌編纂室 一九九八 『勢多郡東村誌 通史編』 勢多郡

東村

高崎市史編さん委員会 二〇〇二 『新編高崎市史 資料編 8』

西海賢二 一九七九 「蚕影考」『日本の石仏』一〇 木耳社 五〇

五七頁

畠山豊 一九九八 「養蚕信仰の諸相」『天の絹絲』福島県立博物館

一〇八―一二三頁

畠山豊 二〇〇二 「蚕の神仏（かみほとけ）」『養蚕機織図』町田市

立博物館 七〇―七三頁

松浦利隆 二〇〇六 「在来技術改良の支えた近代化」岩田書院

村上清文 一九三三 「東京府に於けるオシラさま」『民俗学』五一

一一 民俗学会 三九―六一頁

『明治十年神社明細表』（簿冊番号二七二六―二七三九）群馬県立文書館蔵

書館蔵

『明治十二年上野国神社明細帳原簿』（簿冊番号一九六二―一九八五）群馬県立文書館蔵

群馬県立文書館蔵

『明治十二年上野国神社明細帳』（簿冊番号一九九八―二〇二五）群馬県立文書館蔵

群馬県立文書館蔵

## 註

(1) 『神社明細帳』は昭和二十年代まで県内の神社台帳として使用されたため、群馬県立文書館蔵の原本にはおびただしい数の付箋・補足があり、はなだしいものでは古い頁を廃棄したうえで、新たに書き換えるなどの処置がとられていた。『神社明細帳』に記載されたデータの年代判定は、一部で困難なものとなっている（丑木 一九九三）。記載の年代判定に慎重を期

するため、『神社明細帳』の原資料である『神社明細帳原簿』や明治十年から十一年にかけて調査された『神社明細表』を参照した。また事例の抽出に際して「群馬県行政文書件名目録」五（群馬県立文書館）を使用した。

(2) 群馬県内で『神社明細帳』に関する神社調査の行われた明治十年代は、安政期の横浜開港に伴う生糸・蚕種輸出の好況期を経た時期にあたる。維新直後に二―三万貫だった取引量は、明治十年ころには約五万貫に増加したとされ（松浦 二〇〇六 一八頁）、群馬県内の地域差（気候差）にそくした各種養蚕法の開発が進んだ時期でもある。養蚕業の伸長期である一方で夏秋蚕の飼育は明治中頃まで実施されておらず、年一回の飼育が主流であった。

(3) 鈴木照美は、農耕神の性格の強かった稻荷は、養蚕の興隆にともない養蚕守護の蚕神として信仰され、養蚕が衰退すると元の農耕神として信仰されるとしている。（鈴木 一九八三 一二頁）。

(4) 大間々町では、養蚕雇用労働者である「蚕ピヨウ」が沼田・利根から来ていたという民俗事例がある（大間々町誌刊行委員会 一九九三 七二）。また利根村根利の通婚圏や物資の買出し先についても、近年まで勢多郡や大間々との関係が強かったとされる（群馬県教育委員会文化財保護課 一九八三 六二―六三）。